

中国語における主語・目的語の非対称現象：

任意の解釈をもつ要素の出現形式を中心に

王 丹丹

1 はじめに

中国語では、任意の解釈 (arbitrary interpretation = arb) をもつ主語と目的語の出現形式において非対称現象が観察される。

- (1) a. [e_{arb}/??人_{arb}酒 后 驾 车] 是 违 法 的。
 人 酒 後 運 轉 する 車 である 違 法 の
 ‘人が飲酒運転するのは法律違反だ。’
- b. [欺 負 人_{arb}/*e_{arb}] 是 不 应 该 的。
 い じ め る 人 である ではない す べ き の
 ‘人をいじめてはいけない。’

(1a) では、任意の人を表す主語はゼロ形式で出現するのが自然であるが、任意の人を表す“人”(ren)¹ という顕在的な形式で出現すると、文の容認度が下がる。一方、(1b) では、任意の人を表す目的語は顕在的に出現することが要求され、ゼロ形式で出現すると、任意の解釈はしにくくなる。

本稿の目的は、(1) の主語・目的語の非対称現象 (subject-object asymmetry) が生じる理由を明らかにすることである。本稿の構成は次のようである。第2節では、任意の解釈の定義及び任意の解釈をもつ要素について論じる。第3節では、任意の解釈をもつ主語と目的語の出現形式における非対称現象を提示し、第4節では、その非対称現象が生じる理由について述べる。第5節で

¹ 本稿は、中国語の“人”は任意の解釈をもつ顕在的な要素であると考え。詳しくは2.2節を参照されたい。

は、同様の現象は日本語にも存在し、本稿の分析が日本語に対しても有効であることを示す。第6節では、本稿のまとめと今後の課題について述べる。

2 中国語における任意の解釈をもつ要素

本節では、先行研究に基づいて、本稿における任意の解釈の定義を示し、中国語における任意の解釈をもつ要素について考察する。

2.1 任意の解釈の定義

先行研究では、Chomsky (1981, 1982)、Suñer (1983)、Rizzi (1986)、Jaeggli (1986)²などが任意の解釈について論じている。ところが、任意の解釈の定義については、Luis (2000) も指摘しているように、未だ明確な定義がなされていない。

- (2) a. It is possible [PRO_{arb} to roll down the hill]. (Chomsky1981: 324)
 b. *Pro se dice que va a nevar.* (Suñer1983: 189)
 ‘One says / people say that it is going to snow.’
 ‘雪が降るらしい。’
 c. *L’ambizione spesso spinge __ a commettere errori.* (Rizzi1986: 503)
 ‘Ambition often pushes people to make mistakes.’
 ‘野心は人にミスを犯させる。’

Chomskyは、(2a)におけるPRO_{arb}は、「人が坂を転がり落ちることについて述べることはできるが、岩が転がり落ちることについて述べることにはまずならない」としている³。つまり、任意の解釈はモノではなく、人を表すのである。(2b)はスペイン語の非人称*se*構文 (*impersonal se construction*) に現れる任意の人を表す*pro_{arb}*の例である。Suñerは、その*pro_{arb}*が完全に不特定の

² Jaeggli (1986) は、任意の解釈は指定された時間環境において、ある程度指定される人を指すことができるとしている。本稿はこのような定義には基づかない。

³ 日本語の訳文は、安井稔他訳『統率・束縛理論』(p. 466)による。

(unspecific) であるとしている。(2c) はイタリア語における任意の解釈をもつ空目的語の例である。Rizzi (1986) は、任意の解釈は一般的な (generic) 時間環境において、総称的な (generic) 人、または特定されていない人を表すとしている。

Chomsky (1981, 1982)、Suñer (1983)、Rizzi (1986) などをまとめると、任意の解釈は、一般的な時間環境において、モノではなく、不定または不特定な人を表すといえる。本稿はこのような定義に基づいて考察を進める。

2.2 中国語における任意の解釈をもつ要素

Chomsky (1986) は、 PRO_{arb} に対応する顕在的な要素は英語では“one”、ドイツ語では“man”、フランス語では“on”であると指摘している。また、Rizzi (1986) は、イタリア語の目的語位置における pro_{arb} は“la gente”という顕在的な要素に対応するとしている。このように、任意の解釈をもつ要素は PRO_{arb} 、 pro_{arb} のようなゼロ要素のほかに、顕在的な要素もある。

(3) a. One shouldn't do such thing.

b. We would scarcely believe [one capable of such action].

(Chomsky1986: 117)

c. Questo conduce (la gente) alla seguente conclusione. (Rizii1986: 503)

‘これは人々に以下のような結論を導かせる。’

中国語に関して、呂叔湘 (1986) は、以下のような主語省略の現象を指摘している。

(4) 多 看、多 听、多 琢磨、
多 看 多 听 多 琢磨

经验 多 了 就 会 发现 问题。

経験 多い ASP ならば AUX 発見する 問題

‘多く見て、多く聞いて、よく考えて、経験が多くなったら問題を発見できる。’

(呂 1986: 4)

呂は、以下のように述べている。「誰が見るのか、誰が聞くのか、誰が考えるのか、誰が問題を発見するのか。あなたでも、私でも、彼でも、いかなる人でもよい。特定の人でない以上、はっきりとは言わないのである。…(中略)…形式についていうなら、不定を表す人称代名詞、“one”(英)、“on”(仏)、“man”(独)のようなものを加えなければならない。」(呂(1986: 4)、訳文は筆者)

呂が指摘している(4)のような具現化されず、特定でない指示内容をもつ空主語は任意の解釈をもつ空主語であると思われる。また、呂は、その空主語を具現化させる場合、英語における“one”などに相当する代名詞を利用すると指摘するにとどまり、その要素が何であるかについては論じていない。本稿は、中国語に存在する“人”という総称代名詞は任意の解釈をもつ顕在的な要素であると考えられる。

- (5) a. 人 是 世界 上 最 聪明 的 动物。
 人 である 世界 で もっとも 賢い の 動物
 ‘人は世界で一番賢い動物だ。’
- b. 听说 昨天 张三 打 人 了。
 らしい 昨日 Zhangsan 殴る 人 ASP
 ‘昨日 Zhangsan が人を殴ったそうだ。’
- c. 打 人 是 不 对 的。
 殴る 人 である ではない 正しい の
 ‘人を殴るのは正しくない。’

(5a)における“人”は、「人類」や「人間」という類の解釈である。(5b)の場合は、“人”は「昨日人を殴った」という過去の出来事において、ある程度特定できる人物を表す。また、(5c)は、ある普遍的な真理を叙述しており、一般的な時間環境である。その埋め込み節における目的語の“人”は、特定の誰かを表すのではなく、総称的な人を表す。このような解釈は、本稿が扱う任意の解釈の定義と一致しているため、“人”は中国語における任意の解釈をもつ顕在的な要素であると考えられる。

3 主語・目的語の非対称現象

本節では、中国語における主語・目的語の非対称現象に関する先行研究を概観し、任意の解釈をもつ主語と目的語の出現形式においても非対称現象が観察されることを指摘する。

3.1 先行研究

Huang (1984, 1989) は、中国語における主語・目的語の非対称性を指摘している。(6) は補文における主語・目的語の場合である。

- (6) a. 张三_i 希望[e_i 可以 看见 李四]。
Zhangsan 希望する できる 見る *Lisi*
 ‘Zhangsan は (自分が) *Lisi* を見るができるように願っている。’
- b. *张三_i 希望[李四 可以 看见e_i]。
Zhangsan 希望する *Lisi* できる 見る
 ‘Zhangsan は *Lisi* が (自分を) 見るができるように願っている。’
 (Huang1984: 538)

(6a) の補文における空主語は主文の主語“张三”と同一指示をもつことができるが、(6b) の補文における空目的語は主文の主語“张三”と同一指示をもつことができず、非文になる。

Huang は、関係節にも主語・目的語の非対称現象があるとしている。

- (7) 李小姐 还 找不到[一个[e 心中 喜欢 e 的] 男人]。
Li さん まだ 見つからない 一人 心の中 好き の 男性
 ‘*Li* さんはまだ自分の好きな男性が見つかっていない。’
 (Huang1984: 543)

(7) の関係節において、空主語と空目的語は同時に存在し、それぞれ主文の主語と関係節の主要部を指示する可能性があり、2通りの解釈があると考えられる。ところが、Huang は、その空主語と空目的語の意味解釈は1つし

がなく、曖昧性がないとしている。それは、空主語は主文の主語“李小姐”を指示し、空目的語は関係節の主要部を指示しなければならないという解釈である。

Huangは、空主語と空目的語の性質の違いにより、(6) (7) のような非対称現象を説明している。Huangによれば、空主語は代名詞類 (pronominal)、または \bar{A} -位置⁴にある(ゼロ)トピック (Zero Topic) に束縛される変数(variable)であるが、空目的語は変数でしかないので、(6b)における空目的語は(8)のように、 \bar{A} -位置のゼロトピックを指示しなければならないことになる。しかし、(6b)では、空目的語はA-位置にある主文の主語と同一指示をもつため、非文になる。また、(7)の関係節において、空主語は代名詞類であるため、主文の主語と同一指示をもち⁵、一方、空目的語は変数であるため、 \bar{A} -位置にある関係節の主要部と同一指示をもつことになるという解釈しかないとされている。

(8) [Zero Topic]_j, 张三 希望[李四 可以 看见_{e_j}].

Zhangsan 希望する Lisi できる 見る

‘Zhangsan は Lisi が (ある人を) 見るができるように願っている。’

3.2 任意の解釈をもつ主語と目的語の出現形式における非対称現象

3.1 節で見たように、Huang は意味解釈の面における主語・目的語の非対称性を指摘している。実際、中国語では、(9) に示すように、意味解釈の面だけでなく、形式上でも主語・目的語の非対称現象が観察される。

(9) a. [_{e_{arb}}/??人_{arb}酒 后 驾 车] 是 违法 的。

人 酒 後 運転する 車 である 違法 の

‘人が飲酒運転するのは法律違反だ。’

⁴ 主語や目的語の位置はA-位置 (A-position: A = argument) であり、それ以外の位置 (たとえば、付加詞やCPの指定部の位置など) は \bar{A} -位置 (\bar{A} -position) である (中村他 1989: 76)。

⁵ Huang (1984) は、一般コントロール規則 (Generalized Control Rule = GCR) を提案し、空代名詞の指示内容を認定する。GCR: 空代名詞は最も近い名詞要素と同じ指標をもつ。

- b. [欺負 人_{arb}/*e_{arb}]是 不 应该 的。
 いじめる 人 である ではない すべき の
 ‘人をいじめてはいけない。’

((1) の再掲)

(9) では、文主語における主語・目的語は共に任意の解釈をもつ。(9a) において、任意の人を表す主語はゼロ形式で出現するのが自然であるが、任意の人を表す“人”という顕在的な形式で出現すると、文の容認度が下がる。それに対して、(9b) では、任意の人を表す目的語は顕在的に出現することを要求され、ゼロ形式で出現すると、任意の解釈がしにくくなる。

一方、(10) に示すような (9b) の反例と思われるものが存在する。

- (10) a. 这 件 事 真 烦 人。
 この *CLA* こと 本 当 に 悩 ませ る 人
 ‘このことは本当に人を悩ませる。’
 a’. 这 件 事 真 烦。
 この *CLA* こと 本 当 に 煩 わ し い
 ‘このことは本当に煩わしい。’
 b. 这 件 工 作 真 累 人。
 この *CLA* 工 作 本 当 に 疲 れ る 人
 ‘この仕事は本当に人を疲れさせる。’
 b’. 这 件 工 作 真 累。
 この *CLA* 工 作 本 当 に 疲 れ る
 ‘この仕事は本当に疲れる。’

(10) では、下線部の述語は“烦人”(人を悩ませる)、“累人”(人を疲れさせる)であっても、“烦”(煩わしい)、“累”(疲れる)であってもよい。この場合、(10a’, b’) における“烦”“累”は、それぞれ (10a, b) における任意の解釈をもつ目的語の“人”が脱落しているのではないかと思われるかもしれないが、本稿は、“烦人”“累人”と“烦”“累”はそれぞれ異なった意味のものであり、“烦”“累”は、“烦人”“累人”の目的語“人”が脱落してできたものではない

と考える。このことは、(11) に示すように、“烦人”“累人”は“烦”“累”と同じ意味ではないということによって裏付けられる。

- (11) a. 张三 真 烦人 烦。
 Zhangsan 本 当 に 悩 む 人 悩 む
 i. ‘Zhangsan は本 当 に 人 を 悩 め せ る。’
 ii. ‘Zhangsan は本 当 に 悩 ん で い る。’
 b. 这 个 孩 子 真 累人 累。
 この CLA 子 供 本 当 に 疲 れ る 人 疲 れ る
 i. ‘この 子 供 は 本 当 に 人 を 疲 れ さ せ る。’
 ii. ‘この 子 供 は 本 当 に 疲 れ て い る。’

(11a) は、述語が“烦人”である場合、「Zhangsan が人を悩ませる」という意味であるが、述語が“烦”である場合、「Zhangsan が悩んでいる」という意味になる。(11b) も同様である。(10a) に関して、主語は無生物であり、述語が“烦人”である場合と“烦”である場合は意味的に非常に類似しているが、実際は、同じ意味ではない。述語が“烦人”である場合は、主語“这件事”の属性について説明しているのである。述語が“烦”である場合、無生物の主語“这件事”は悩むことがありえないため、話し手の気持ち、感覚についていうのであると考えられる。

要するに、(10) における“烦人”“累人”と“烦”“累”は場合によっては類似した意味を表すが、実際は異なった意味の要素であり、(10) における“烦”“累”は、“烦人”“累人”の目的語“人”が脱落してできたものではないと思われる。そのため、本稿の観察、つまり、中国語では任意の解釈をもつ目的語は常に顕在的に出現し、脱落しにくいという観察は正しいといえる。

ところで、(9) で観察されるように、なぜ任意の人を表す主語は顕在的な形式ではなくゼロ形式で出現するのに、任意の人を表す目的語はゼロ形式ではなく、顕在的に出現すると要求されるのだろうか。次節では、その理由について考察する。

4 非対称現象が生じる理由に関する考察

前節では、中国語では、任意の人を表す主語は顕在的ではなくゼロ形式で出現するが、任意の人を表す目的語はゼロ形式ではなく顕在的に出現しなければならないという非対称現象が存在することを指摘した。本節では、この現象が存在する理由について考察する。また、本節の最後で、本稿の分析と先行研究の分析との関連について述べる。

4.1 任意の人を表す主語がゼロ形式で出現する理由

Huang (1984, 1989) は、(12b) における任意の解釈をもつ空主語を (12a) の英語の不定形節にある PRO_{arb} と平行的に捉える。

- (12) a. It is unclear what PRO to do.
 b. [PRO 吸 烟] 有害。
 吸う タバコ 有害
 ‘タバコを吸うのは有害だ。’

(Huang1989: 193)

このような捉え方をすると、なぜ (9a) の文主語では、任意の人を表す顕在的な主語が出現しにくいのかということは問題とならない。それは、本来、PROの出現位置に顕在的な要素は出現できないからである。ところが、(13) に示すように、中国語における文主語の主語位置では、任意の解釈をもつ空主語 e_{arb} のほかに、顕在的な主語の“孩子”(子供)、“孕妇”(妊婦) も出現できる。

- (13) [e_{arb} /孩子/ 孕妇 吸 烟] 有害(大脑 发育/ 胎儿 发育)。
 子供 妊婦 吸う タバコ 有害 大脑 发育 胎儿 发育
 ‘子供が/妊婦がタバコを吸うのは脳の发育/胎児の发育に有害だ。’

本稿は、(9a) (12b) における空主語を PRO として分析するのは妥当ではないと考える。この理由は理論的な根拠に求められる。格フィルター (Case

Filter) により、顕在的な主語は格を付与されなければならない。また、格を付与される位置は INFL の中の要素によって統率される。そうすると、(13) の文主語の主語位置に顕在的な主語が出現できるということは、その主語位置は統率されることを意味している (Huang1989: 188)。一方、PRO の出現は統率されない位置に限られる (PRO の定理) ため、(9a) (12b) における任意の解釈をもつ空主語を PRO として分析するのは妥当ではない。さらに、(9a) に示すように、任意の解釈をもつ空主語が顕在的な要素と交替しにくいのは、その文主語の環境が顕在的な要素が出現できない環境であるためではなく、他の理由による可能性がある。

また、Huang (1984, 1989) は、主語位置の空範疇は代名詞類のほかに、ゼロトピックに束縛される変数として分析する場合があるとしている。しかし、本稿は、文主語における任意の解釈をもつ空主語は変数として分析するのは難しいと考える。その理由は 4.2 節で行う。

本稿は、中国語では、文主語における任意の解釈をもつ空主語は PRO ではなく、 pro_{arb} であることを主張する。この主張は、中国語は pro-脱落言語であることによって裏付けられる (Huang1984, 1989)。 pro は顕在的な要素と交替することができる。(14) に示すように、中国語では、 pro と顕在的な代名詞との交替現象が多く見られる。任意の解釈をもつ空主語の位置では、(13) に示すように、顕在的な要素も出現できるため、その空主語を PRO として分析するよりも、 pro_{arb} として分析する方が自然であると考えられる。

- (14) 张三 说[pro /他 很 喜欢 李四]。
Zhangsan 言う 彼 とても 好き *Lisi*
 ‘Zhangsan は (彼が) Lisi のことが大好きと言った。’

ところで、(14) では、 pro が顕在的な代名詞 “他” と交替しても文は適格であるが、(9a) では、任意の解釈である pro_{arb} が顕在的な要素 “人” と交替すると、文の容認度が下がる。これはなぜであろうか。

次のような例を見てみよう。

- (15) a. **未成年人** 飲 酒 違反 法律,
 未成年 飲む 酒 違反する 法律
 但是 **成年人** 飲 酒 并 不 违法。
 しかし 成年 飲む 酒 別に ではない 違法
 ‘未成年が飲酒するのは法律違反だが、成年が飲酒するのは法律違反ではない。’
- b. **儿童** 抽 烟 有害 大脑 发育,
 児童 吸う タバコ 有害 脳 発育
 但 **成年人** 抽 烟 并 不 影响 大脑。
 しかし 成年 吸う タバコ 別に ではない 影響する 脳
 ‘児童がタバコを吸うのは脳の発育に悪いが、成年がタバコを吸うのは脳に影響を与えない。’

(15) に示すように、中国語では、文主語における主語が顕在的に出現する場合、対比の意味内容をもつ後節がくることが予測されやすい⁶。また、“未成年人”(未成年)や“儿童”(児童)は特定の人を表すわけではないが、共にある特徴(18歳以下の人)を備えた集合であり、“成年人”(成年)という集合(18歳以上の人)と対立している。つまり、この場合の主語は類やクラスの意味解釈である。同様に、(16) に示すように、任意の解釈をもつ空主語は、“人”という顕在的な形式で出現すると、任意の解釈としては成立しないが、“动物”(動物)と対立する集合や類の解釈としては許容される。

- (16) **人** 酒 后 驾 车 是 违法 的,
 人 酒 後 運転する 車 である 違法 の
 但是 **动物** 驾 车 并 不 违法。
 しかし 動物 運転する 車 別に ではない 違法
 ‘人が飲酒運転するのは法律違反だが、動物が飲酒運転するのは法律違反ではない。’

⁶ なぜ中国語における文主語では、顕在的な主語が出現すると対比の意味解釈が含意されるのかについては今後の課題としたい。

この類やクラスの対立の解釈は (17) のような諺においてより明らかになる。

- (17) a. 人以类聚，物以群分。
 ‘人は類をもって集まり、物は群れをもって分ける。’
 b. 人为财死，鸟为食亡。
 ‘人間は金銭のために身を滅ぼし、鳥は餌のために身を滅ぼす。’
 c. 人怕出名猪怕壮。
 ‘人は有名になるといざこざを招き、豚は太ると殺される。’

一方、Moltmann (2006) は、英語における任意の解釈を表す要素 “one” と PRO_{arb}の意味解釈について論じる際に、任意の解釈は “kind” (類) を表すものではないと指摘している。その理由は、(18) に示すように、“one” は通常、ある「類」を指示する述語 “rare” (稀な、珍しい) や “widespread” (広く行きわたった) などと共起できないためであるとされている。

- (18) a. # One could become rare.
 b. This kind of animal could become rare.

(Moltmann2006: 260)

そのため、(15)(16) に示すように、文主語では、任意の解釈をもつ空主語は顕在的な主語と交替することができるが、その場合、類やクラスの解釈になってしまう。これでは、任意の解釈は「類」を表さないという概念と相違が生じてしまう。そこで、任意の解釈を維持するために、主語位置では顕在的に出現せず、ゼロ形式で出現するのではないかと思われる。

4.2 任意の人を表す目的語が脱落しにくい理由

3.2節で述べたように、中国語では、任意の人を表す目的語 “人” は常に顕在的に出現しなければならず、脱落すると任意の解釈として考えにくくなる。

- (19) [欺负 人_{arb}/*e_{arb}]是 不 应该 的。 ((1b) の再掲)
 いじめる 人 であるではない べき の

‘人をいじめてはいけない。’

本稿は、任意の人を表す目的語が脱落しにくいのは空目的語の性質についてと考える。Huang (1984, 1989) は、空目的語は \bar{A} -位置にあるゼロトピックによって束縛される変数であるとしている (20)。そうすると、空目的語が脱落するにはまずトピックになる必要があると思われる。ところが、(21) が示すように、任意の解釈をもつ目的語は (20) のように分析できない。

(20) [Zero Topic]_j, 张三 希望[李四 可以 看见_{e_j}]。

Zhangsan 希望する *Lisi* できる 見る

‘Zhangsan は Lisi が (ある人を) 見ることができるように願っている。’

((8) の再掲)

(21) ?*人_{arb}, [欺负_{e_{arb}}] 是 不 应该 的。

人 いじめる である ではない すべき の

‘人はいじめることをしてはいけない。’

なぜ (19) を (21) のように分析できないのか。(21) では、目的語の“人”を文主語から抜き出し、島条件 (Island Condition) に違反するため、非文になるのではないかというように思われるかもしれないが、本稿は、(21) が非文になるのは島条件に違反するためではないと考える。

Huang, etc. (2004) は、中国語の文主語にある空目的語はトピックと同一指示をもつことができるとしている (Huang, etc. (2004), Chapt7: 14) 。

(22) a. [李四 照顾 这 个 小孩]_i 最 合适。

Lisi 世話する この *CLA* 子供 最も ふさわしい

‘Lisi がこの子供を世話するのが最もふさわしい。’

b. 这 个 小孩_i, [李四 照顾_{e_i}] 最 合适。

この *CLA* 子供 *Lisi* 世話する 最も ふさわしい

‘この子供は、Lisi が世話するほうが最もふさわしい。’

(22b) では、文主語にある空目的語は主題の“这个小孩”と同一指示をもつ

ている。Huang は、(22b) は (23) のような構造をもつとしている。

(23) Topic_i [Clause [Subject pro_i ... t_i] ...]

つまり、文主語における目的語は、まず文主語の周辺に移動し、トピックになり、痕跡を残す。また、そのトピックはゼロの形になり、空の代名詞 *pro* が残る。さらに、GCR (注 5) により、文主語の周辺にある空代名詞は文に加えているトピックと同じ指標をもつことになる。このようなプロセスをして文主語における空目的語はトピックと同じ指標をもつことができる。このプロセスでは、目的語は文主語の外へ移動しないため、島条件に違反しないとされている。

このように、(21b) が非文であるのは島条件に違反するためではなく、他の理由によると思われる。本稿は、その原因はトピックになる要素の特徴に求められると考える。Li and Thompson (1976: 461)、曹 (2005: 48) などは、中国語におけるトピックは必ず特定 (*definite*) の要素でなければならないとしている。一方、2.1 節で述べたように、任意の解釈は不定または不特定な人を表す。(21) における任意の人を表す要素は不特定のであるため、トピックになりにくい。さらに、目的語が脱落する場合にはまずトピックになることが必要になる一方、任意の解釈をもつ要素はトピックになりにくいために、脱落しにくいのではないかと考えられる。また、不定の目的語はトピックになりにくいということは沈 (1998) においても指摘されている。

- (24) a. 吃 苦。
 食べる 苦しみ
 ‘苦勞する。’
 b. 吃 菜。
 食べる おかず
 ‘おかずを食べる。’
 (25) a. *苦, 吃 了。
 苦しみ 食べる ASP

‘苦しみは耐え忍んだ。’

b. 菜, 吃 了。

おかず 食べる ASP

‘おかずは食べた。’

c. 这个 苦 我 吃 不 了。

この 苦しみ 私 食べる ではない ASP

‘この苦しみは私が耐え忍べない。’

(沈 1998: 43)

沈 (1998) は、“菜”(おかず) は不定でも、定でも使われるが、“苦”(苦しみ) はふつう不定であるため、(25b) では、“菜”を文の前に移動してもよいが、(25a) に示すように、“苦”を文の前に移動することはできないとしている。また、(25c) のように、もし“苦”の前に修飾成分“这个”(この)を加えれば、“苦”は定になり、文の語順を変えてもよいとされている。

要するに、空目的語の性質(変数)により、目的語が脱落するためにはトピックになる過程が必要となるということである。一方、任意の解釈をもつ要素は不特定のであり、トピックになりにくい。そのため、任意の解釈をもつ目的語は常に顕在的に出現し、脱落しにくいのである。

ところで、4.1節で述べたように、主語位置の空範疇は代名詞類あるいは変数として分析することができるが、本稿は、任意の解釈をもつ空主語は変数として、つまり、(26)のように分析するのは難しいと考える。その理由も、本来、任意の解釈をもつ要素はトピックになりにくいからであると考えられる。

(26) [Zero Topic]_{arb}, [e_{arb}酒 后 驾 车] 是 违 法 的。
酒 后 運 転 的 車 是 違 法 的
‘飲酒運転するのは法律違反だ。’

4.3 本稿の分析と先行研究の関連

本稿は、基本的にHuang (1984, 1989) の議論に従って分析を行った。特に、任意の解釈をもつ目的語が脱落しにくい理由に関して、空目的語はゼロトピックに束縛される変数であるというHuangの議論を利用して説明した。本稿

は、任意の解釈をもつ目的語の出現形式における制約を説明したが、これは、空目的語はゼロトピックに束縛される変数であるというHuangの主張を別の側面から裏付けているといえる。一方、任意の解釈をもつ空主語に関する分析は、Huangの分析と異なっている。本稿は、文主語における任意の解釈をもつ空主語はPRO_{arb}ではなく、pro_{arb}として分析したほうが妥当であると主張した。

5 日本語からの証拠

第4節、第5節では、中国語では、任意の解釈をもつ主語と目的語の出現形式において非対称現象があることを指摘し、その理由について考察した。実際、この現象は中国語においてだけでなく、日本語においても観察される。

- (27) a. [pro_{arb}/??人が/子供がタバコを吸うのは]よくない。
 b. 時には、些細なことが人を/*e_{arb}悩ませてしまう。

(27a) に示すように、日本語では、中国語と同様に、文主語の主語位置では、任意の解釈を表す空主語のほかに、顕在的な主語も出現できる。ところが、任意の人を表す語彙要素の「人」が出現すると文の容認度が下がる。一方、(27b) に示すように、目的語位置では、任意の人を表す「人」は顕在的に出現することを要求され、ゼロ形式になると任意の解釈はしにくくなる。この現象は、3.2節で述べた中国語における現象と一致している。さらに、筆者の考察では、4節で行った中国語で非対称現象が生じる理由についての分析は、日本語に対しても有効であると考えられる。

まず、(27a) に示すように、日本語における文主語の主語位置では、任意の解釈をもつ空主語のほかに、顕在的な主語も出現できる。これは、その文主語では時制辞“r(u)”が存在することによって保障される⁷。そのため、(27a) の文主語における任意の人を表す空主語はPRO_{arb}よりもpro_{arb}として分析したほうが妥当であるといえる。この点に関しては中国語と同様である。

⁷ Takezawa (1987) は、日本語では、主格の出現は時制辞の出現に依存しているとしている。

次に、(27a) の文主語では、「子供」などの語彙主語が問題なく許容されるが、任意の人を表す「人」は許容されない。また、(28) に示すように、顕在的な主語「未成年」や「人」が出現する場合、類やクラスの読みが強くなる。そこで、任意の解釈を維持するためには、「人」という語彙主語ではなく、ゼロ形式で出現することが要求されていると考えられる。

- (28) a. [未成年が]タバコを吸うのは]法律違反であるが、[成年が]タバコを吸うのは]法律違反ではない。
 b. [人が]飲酒運転するのは]違法であるが、[動物が]飲酒運転するのは]違法ではない。

また、(27b) に示すように、日本語においても任意の人を表す目的語は脱落しにくい。⁸ このことも中国語に対するのと同様な分析により説明できる。Hasegawa (1984/5) は、Huang (1984) に従い、日本語における空目的語はゼロトピックに束縛される変数であるとしている。そのため、目的語が脱落する場合、トピックによって束縛され、トピックと同一指示をもつ。ところが、任意の解釈を表す「人」は不特定のであるため、トピックになりにくい⁹。従って、任意の解釈をもつ目的語は常に顕在的に出現することを要求される。

このように、任意の解釈をもつ主語・目的語の出現形式における非対称性は中国語においても日本語においても観察され、より普遍性がある現象であるといえる。

6 終わりに

本稿は、中国語における任意の解釈をもつ主語と目的語の出現形式における非対称性を指摘し、その理由について考察した。まず、第2節では、先行研究を検討したうえで、中国語における“人”は任意の解釈をもつ顕在的な

⁸ このことは、Kuroda (1983) の考察と一致している。Kurodaは、日本語における空目的語は任意の解釈をもたないと指摘している。

⁹ 長谷川 (1995) は、不定の名詞自身が主題化できないとしている。

要素であると述べた。第3節では、中国語では、任意の解釈をもつ主語は常にゼロ形式で出現するが、任意の解釈をもつ目的語は常に顕在的に出現しなければならないという非対称現象を指摘した。その後、第4節では、その非対称現象が生じる理由の説明を試みた。その際に、中国語の文主語における空主語は、先行研究で仮定されている PRO_{arb} ではなく、 pro_{arb} であることを主張した。また、任意の解釈をもつ主語が常にゼロ形式で出現するのは、文主語という環境において任意の解釈を維持するためであり、任意の解釈をもつ目的語が常に顕在的に出現するのは、空目的語の性質およびトピックになる要素の特徴に求められるからであるという結論に至った。さらに、第5節では、本稿が指摘した非対称現象は中国語においてだけでなく、日本語においても観察されることを示した。

4.1節では、文主語における任意の解釈をもつ主語は常にゼロ形式で出現する理由について考察する際に、文主語では、顕在的な主語が出現すると、類やクラスの対比という読みが強くなることが明らかになった。これについては、本稿は、現象の指摘にとどまり、それが生じる理由については明らかにできなかったので、今後の課題としたい。

謝辞

本稿の完成にあたり、丁寧にご指導して下さった竹沢幸一先生、また日本語をチェックして下さった上田裕氏に感謝を申し上げます。

【参考文献】

- Charles N. Li & Sandra A. Thompson (1976) Subject and topic: A new typology of language. In: Charles. N. Li (ed.) *Subject and Topic*, 457-489. New York: Academic Press.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on government and binding*. Foris: Dordrecht. (安井稔・原口庄輔訳『統率・束縛理論』研究社出版, 1986).
- Chomsky, Noam (1982) *Some concepts and consequences of the theory of government and binding*. Cambridge: MIT Press.

- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of language: Its nature, origin and use*. New York: Praeger Publishers.
- Hasegawa, Nobuko (1984/5) On the so-called ‘zero pronouns’ in Japanese. *The Linguistic Review* 4: 289-341.
- 長谷川信子 (1995) 「省略された代名詞の解釈」『日本語学』14: 27-34.
- Huang, James (1984) On the distribution and reference of empty pronouns. *Linguistic Inquiry* 15: 531-574.
- Huang, James (1989) Pro-drop in Chinese: a generalized control theory. In: Osvaldo Jaeggli and Kenneth J. Safir (eds.) *The Null Subject Parameter*, 185-214. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Huang, James, Li Y.-H. Audrey, Li Yafei (2004) *The syntax of Chinese*. Forthcoming from Cambridge University Press.
- Jaeggli, Osvaldo (1986) Arbitrary plural pronominals *Natural Language and Linguistic Theory* 4: 43-76.
- Kuroda, Sigeyuki (1983) What can Japanese say about government and binding? *WCCFL* 2: 153-164.
- Luis, Alonso Ovalle (2000) Is the ‘arbitrary interpretation’ a semantic epiphenomenon? In: Kiyomi Kusumoto and Elisabeth Villalta (eds.) *Issues in Semantics and its Interface*, 155-183. Amherst, MA: GLSA.
- 呂叔湘 (1986) 「汉语句法的灵活性」『中国语文』190: 1-9.
- Moltmann, Friederike (2006) Generic one, arbitrary PRO, and the first person. *Natural Language Semantics* 14: 257-281.
- 中村捷・金子義明・菊地朗 (1989) 『生成文法の基礎—原理とパラミターのアプローチ』研究社出版.
- Rizzi, Luigi (1986) Null object in Italian and the theory of pro. *Linguistic Inquiry* 17: 501-557.
- 沈力 (1998) 「浅述汉语动词的分离」『中国語学』244: 43-53.
- Suñer, Margarita (1983) pro_{arb} *Linguistic Inquiry* 14: 188-191.
- Takezawa, Koichi (1987) *A configurational approach to case-marking in Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Washington.
- 曹逢甫 (2005) 『汉语的句子与子句结构』北京: 北京語言大学出版社.

The subject-object asymmetry in Chinese: on the appearance form of the elements with arbitrary interpretation

Dandan WANG

This paper examines the asymmetry phenomenon in the appearance form of the subject and the object with arbitrary interpretation in Chinese. First, we point out that the asymmetrical phenomenon is that the subject with arbitrary interpretation must appear in zero form, while the zero object with arbitrary interpretation must appear overtly. Then, we indicate that the generic pronoun “ren” (people) is the overt element with arbitrary interpretation in Chinese. And the zero subject with arbitrary interpretation is not PRO_{arb} but pro_{arb} because there can be an overt subject in the sentence subject.

In conclusion, we argue that: (i) the reason the subject with arbitrary interpretation always appears in zero form is required by the maintenance of arbitrary interpretation. In a sentence subject, when a subject appears overtly, a contrast reading will arise. In that case, the overt subject is interpreted as “kind” or “class”. On the other hand, the arbitrary interpretation can not be interpreted as “kind” or “class” (Moltmann2006). Therefore, the subject with arbitrary interpretation appears in zero form but not overtly. (ii) The reason the object with arbitrary interpretation does not appear in zero form is derived from the properties of a zero object and the element that can be topicalized. The property of a zero object is being a variable which is bound by a Zero Topic (Huang1984, 1989). And one characteristic of topic is that it must be a definite element. So, when an object appears in zero form, it must first become a topic. But the object with arbitrary interpretation can not become a topic because it is indefinite. Therefore, it can not appear in zero form.